

女性消防団員だからこそできること



消防団というと男性だけと思われがちですが、市には16人の女性消防団員がいます。約1年前に消防団としての活動を始めたばかりの、広報ボランティア大江さん。女性消防班の活動や、団員がどのような思い、きっかけで入団したのか取材しました。また、今年7月の西日本を中心に大きな被害があった豪雨災害を受けて、教訓とすべきことを考えます。

▲県消防ポンプ操法大会で躍動する濱口百合子さん（左）と中野雄子さん（右）

街角記者

大江由紀子
おおえ ゆきこ



女性消防班の一員として、約1年前から活動。応急手当普及員の資格を持ち、初期対応の大切さを伝えています。

「街角記者が行く」とは、広報ボランティアが読者の皆さんを代表して記者となり、街角に出て市や関連団体の取り組みを取材するコーナーです。記者の目線で、ときには歯に衣着せぬ物言いで関係者を取材し、皆さんの疑問に答えていきます。

消防団員は男性だけじゃない

市消防団は、総勢304人で、そのうち16人が女性です。男性の消防団員と同様に、地域のボランティアとして活動しています。消防活動というと、火災時の消火活動のイメージが強いかもしれませんが、市女性消防班は、救命講習や火災警報器の普及促進など、主に防火、防災啓発活動などを行っています。

女性消防班は7年前に創設したばかりで、まだ人数は少ないのですが、これまでさまざまな活動をしてきましたので、その一部を紹介します。

絆を深める消防ポンプ操法大会

2年に1度、実際の火災現場での消火を想定し、消防用ポンプの操作の迅速さや正確さを競う県消防ポンプ操法大会が開催されています。男性が操法大会で使用される小型ポンプを一回り小さくした軽可搬ポンプを使用して、およそ50m先の標的に放水します。

出場する選手は、仕事、家事、育児をこなしながら、消防署員



▲救命講習会で人形を使って心肺蘇生法を指導

の指導と男性消防団員のサポートのもと、練習を重ねます。今まで3度県大会に出場し、入賞したことはありませんが、個人では最優秀選手賞を受賞した団員もいます。私も昨年、補助員として操法大会に参加しました。補助員は走ったり、ポンプを操作したりするのではなく、給水管を支えるのが仕事なので、まだ、操法のことがかわかっていない私でも対応できるものでした。およそ4カ月間の訓練と、大会をやり終えた後の達成感、まるで部活動のようで、感動的だったのを覚えています。この訓練を通して、団員の絆が深まり、日々の活動にも生かされています。

いざというときに備えて救命講習

もし、目の前にいるご家族や知人が突然意識を失い、倒れたらどうしますか。心臓が止まると、3分後には死亡率が50%になると言われています。救急車が到着するまでに応急処置をすることで命を救うことができます。かもしれない、いざという時に備え、一人でも多くの方が救命救急法を習得するために、年に数回、市内の中学校などで救命講習会を開催しています。ほとんどの団員が応急手当普及員の資格を取得し、消防署員と一緒に心肺蘇生法のほか、止血法、搬送法の指導、AEDの操作説明などを指導しています。

また、この講習会の際、家庭用火災警報器設置の啓発も行っています。就寝中に火災が発生し、火災警報器の警報音で火事に気が付き一命を取り留めた事例などを紹介しながら、設置の大切さを伝えています。

さまざまなアイデアで伝え方を工夫した防災啓発

私がまだ入団していない、お



▲紙芝居を使った防災啓発活動

よそ2年前、神興幼稚園で地震を想定した避難訓練を実施したそうです。そのとき、小さな子どもたちに避難方法を伝えるため、考えたのが「紙芝居」でした。少しでも子どもたちに理解してもらいように大型紙芝居を手づくりするなど、団員それぞれが意見を出し合い、伝え方を工夫していたそうです。

また、子ども向けだけでなく、地域住民に対する火災予防啓発活動や応急手当の普及啓発などは老若男女問わず、できるだけ多くの人に対して行わなければなりません。講習会などで、団員が細かく気を配り、穏やかに接することで、受講者も受け入れやすくなっているようです。

街角記者が行く

～広報ボランティアの取材報告～



思いが福津を守るエネルギーに

父は元消防団長 ずっと身近にあった消防団

全国的に消防団員数が減少している中、女性の人数は増え続けている。全国で2万5千人以上の女性が消防団に入団しています。市女性消防班は、まだ16人と少ないのですが、入団したきっかけは人それぞれです。どのような思いで入団し、それからの意識の変化など、2人の班員に話を聞きました。

1人目は市女性消防班で初めての学生、吉田しおりさんです。「以前、父が消防団長をしていたこともあり、消防団を身近に感じていた。まちのことをもっと知りたいと思ったのがきっかけ」と話す吉田さん。女性消防班が立ち上がったのは吉田前団長の時で「父がどんな活動をしているのか知らなかった。地域のために活動しているのを知って、すごいことをしていたんだなと感心している」と言います。他市町村の消防団員が飲酒運転で逮捕されると報道されるな

ど、吉田さんは消防団にあまり良い印象を持っていませんでした。でも、消防団に入ってから、男性消防団員が真剣に訓練する姿を見て感動し「思っていたものとは違っていた。きちんとした組織で驚いた」と消防団の印象は今が変わっているようです。

「消防団として活動することで、家族との時間は減るけれど、ほかの班員や地域の人と交流できる。この立場でしか感じられないこともあると思うので、色々な刺激を受けて成長したい」と話してくれました。



▲専門学校に通いながら活動する吉田さん

仕事で消防とつながり 消防を仕事に生かす

2人目は女性消防班の班長、松永幸代さんです。松永さんは介護や支援が必要な人が、その人らしい生活を送れるよう計画を立てていくケアマネージャーという仕事をしています。また「認知症セーフティネットワーク蓮華草」という団体の代表を務め、認知症サポーター養成講座を行うなど、多くの人に認知症への理解を深めてもらうための活動をしています。

5年前、男性消防団員が認知症サポーター養成講座を団体で受講したのがきっかけで「自分も何かできることはないか」と消防団に入団したそうです。救命講習や、防災の啓発活動などを通して身に付けた知識は、仕事柄、高齢者の安全を守るために生かされているそうです。松永さんは「女性消防班に入ったことで防災意識が高まり、防災マップを見て避難所の確認などをするようになった。災害が起



▲消防活動と仕事の思いを語る松永さん

9月1日は防災の日

9月1日は「防災の日」と決まっています。この日付は1923年9月1日に発生し、10万人



▲手光区の道路が崩れ、一時通行止めに

以上の死者、行方不明者を出した関東大震災に由来しています。気象庁の気象統計情報でも、台風の影響、上陸は8月から9月にかけて多く、制定された前年の昭和34年には伊勢湾台風によって多くの人が被害に遭いました。

この9月1日を含む、8月30日から9月5日は防災週間と定められています。地震や台風、豪雨災害などの認識を深め、改めて、どのように備えるのか考えておきましょう。

平成30年7月豪雨から 学ぶべきこと

7月5日から7月8日にかけて、西日本の広い範囲で豪雨と

なりました。亡くなられた人は200人を超え、今も行方不明者の捜索が続いているそうです。幸いなことに市内で人的被害はありませんでしたが、土砂崩れや道路の通行止めなど、一部に被害が出ています。女性消防班でも、農業を営む人、建設業に勤めている人などが豪雨の影響を受けています。

最近、大雨警報などが以前より早く発令されるようになったと思います。今回の豪雨で、緊急速報メールが何度も来るけれど身の回りでは被害はなく「自分は大丈夫だ。このメールは関係ない」と思った人も多いのではないのでしょうか。あの着信音に慣れてしまっただけで感覚が狂い、



▲土砂が崩れ、市内の民家が被害に

いざ大災害に襲われてしまったら、逃げ遅れてしまうかもしれません。市では11月10日に地震を想定した一斉防災訓練を行うそうですので、ぜひ参加しましょう。

一斉防災訓練

地震、火災、豪雨——。災害が起きたら、どう行動しますか。

11月10日(土) 午前8時45分

防災行政無線による放送とサイレン吹鳴、エリアメールを配信します。家庭や地域、学校、事業所などで、訓練への取り組みをお願いします。

大規模地震が発生したらどうすればいいのか、考え、行動することが目的です。安全確保のためには、慌てないことが大切です。どのように行動すればいいのか、訓練を通じて体で覚えておきましょう。

家庭でもできる防護訓練

地震の際の安全確保行動「まず低く、頭を守り、動かない」を身につけましょう。地震によるけがなどの大半は、家屋の倒壊やガラスの破片、落下物が原因です。安全な場所に避難するより、移動距離を最小限にとどめることが重要です。

訓練は3つの安全行動を“その場”で行うだけ!



避難訓練では

安全を確認して屋外に出ます。その際、白いタオルを玄関先に掲げてください。「我が家は無事」という意思表示になります。タオルを掲げていない家の中には、家具の下敷きになって助けを求めている人がいるかもしれないということを意識しておきましょう。

問い合わせ 市防災安全課 ☎43・8107

街角記者が行く

～広報ボランティアの取材報告～

